

『 寿命 』

今年の夏、ワタシは永遠の眠りにつきました…。偶然にも、ワタシの同朋もまた悲しいことに永遠の眠りにつくことになりました。…合掌。

私がお家のご主人様のもとに来たのは、かれこれ40数年前かしら…。まだそのときご主人様は高校生でした。だから、坊ちゃまとお呼びしていました。紅顔の美少年からニキビ面への移行期でもあり、女の子にも興味を持ち始めて夜遅くまで勉強しているふりをして、こっそりと自室でラブレターを書いていた坊ちゃまの姿を、つい昨日のこのように思い出します。フフフ…。いったいどんな感じの女の子に、どんな内容のラブレターを書いているのだろうかとワタシは興味津々で、後ろからこっそり覗き込んで見たかったけれど、坊ちゃまはそれをさせてくれませんでした。ワタシはいつも赤いドレスを身にまとい、少年期から青年期に脱皮してゆく坊ちゃまの後姿を、いつも温かい眼差しで見つめ続けていました。

坊ちゃまが受験生のときも、夜更かしして明け方近くまで勉強していたので、当日の試験には絶対朝寝坊をさせないようにと、私は片時も坊ちゃまの側を離れずに、朝が来るまで坊ちゃまに寄り添って見守り続けました。朝になると、ワタシは明るく大きな声で『朝が来ましたよ、起きてください、坊ちゃま！』と、起こしてあげるのです。坊ちゃまは眠いまま顔をこすりながら大きな伸びをして、寝癖のついたボサボサの髪のまま階下へ降りていらっやりました。懐かしいわ、あの頃が…。ワタシが一番坊ちゃまから必要と9されていた時代だったわ。受験は何と言っても坊ちゃまの将来の人生が決まるかも知れないような、重大な事柄のようにその時は思っていたのですから…。

やがて、坊ちゃまは大学生になり、お家へ帰る時間も遅くなりお友達の数も増えてきて、だんだん私が付ききりでお世話をする時間も少なくなってきました。そして大学卒業後、社会に出てしばらくしてお見合結婚をして新しい家庭を持たれました。坊ちゃまは、優しいお方です。新婚家庭にも私を連れて行ってくださって、一緒に住むことをお許しになりました。ワタシは心底嬉しかった。しかも、寝室担当のお部屋係として…。もっと若くてピチピチした優秀なお部屋係がこの世には沢山いるというのに…。

坊ちゃまと奥様の間には、その後お二人の男の子が生まれ新居を建てられ、新居の居間担当係には、ワタシよりもずっと清楚で落ち着いた感じの、無口な美人担当者が選ばれました。彼女もまた、坊ちゃまがスカウトしてきた方で、お子様たちの成長を目を細めながらじっと物静かに見守っていました。彼女はワタシと違って一日中ひと言もしゃべらないのに、家族みんなからの信頼を一身に集めているようで、家族の者全員が彼女に伺いを立てながら、その日のスケジュールを立てているように感じられました。おしゃべりなワタシは、無口でおとなしい彼女にちょっと嫉妬していました。ワタシは彼女ほどにはみんなから見つめられていないし、信頼されていないのではないかと…。

それでも、ワタシたち二人はそれぞれの担当のお部屋で、出来る限り坊ちゃまと家族のために、迷惑をかけないように昼夜をいとわず力の限り精一杯働き続けました。しかし寄る年波には勝てないというか、ワタシはある日大失敗を犯してしまったのです。坊ちゃまが大切な会合に出席する時間になっても、坊ちゃまを起こすことを忘れてしまったのです。と言うよりも、判ってはいたのですが声が出なかったのです。『坊ちゃま、時間が来ましたよ。』と、声を出そうとしたのですが、声が全く出ない。坊ちゃまは約束の時間が来たとはつゆ知らず、昏々と昼寝を続けています。ワタシはあの時ほど辛くて悲しくて情けない思いをしたことはありませんでした。ワタシに全幅の信頼を置いていた坊ちゃまの信頼を、ワタシは完全に裏切ってしまったのですから…。

坊ちゃまは、ワタシの声ではなくて奥様からの声によって眠りから覚まされ、大切な約束の時間に遅刻したことを知り激怒されました。『どうして起こさなかったんだ！』坊ちゃまはワタシの身体を揺り動かし、『どうしてなんだ、どうしてなんだ、この役立たずめが！』とたいそうな剣幕でワタシを叱り、寢床から飛び起きて大切な会合に飛ぶように出かけられました。

ワタシは思いました。「ああ、これで私もこのお家からお払い箱になってしまうんだわ。長いこと坊ちゃまのお世話をし続けてきたけれど、声が出なくなってしまうえば、もう坊ちゃまのお世話を出来なくなってしまう。身体の方はまだまだいたって健康なんだけれど…。この先、ワタシにはいく先のあてなんかないけれど、これも私の運命なんだわ。悲しいけれど、とうとうお別れの時が来たのね…。」私は覚悟を決めて、坊ちゃまの帰りを待っていました。その夜遅くに坊ちゃまは帰宅されて、奥様と何か相談されていたようでした。

翌朝、坊ちゃまは声の出なくなったワタシの身体を優しく抱き上げてくれて、『昨日はオレも気が動転して、お前にはひどい言葉を浴びせてしまってすまなかった。いいんだよ、たとえ声が出なくなっても、お前の身体はまだまだ元気じゃないか。体力の続く限りオレのお世話を続けていいから、安心なさい。』と温かいお言葉をかけてくださいました。そして、私の身体の傷の手当てをしてくださいました。坊ちゃま、アリガトウ…(涙・涙・涙)。その日から、坊ちゃまはもう一人の若くてピチピチの声の美しい女の子をワタシの補佐役につけてくださって、二人で坊ちゃまのお世話をするようになりました。

あの日から10年余り、ワタシは声を一時的に回復した時期はあったものの、再び声を失ったままで坊ちゃまのお世話を続けていました。そして、今度こそ本当に坊ちゃまとお別れの時が来たのでした。坊ちゃまに「おやすみなさい」を言ったあと、ワタシの心臓は静かにゆっくりと鼓動を止めてしまったのです。電池切れとかではありませんでした。私の身体を動かし続けていたムーブメント本体が壊れてしまったようでした。もう回復の見込みはありません。ワタシにはそのことが良く判りました。ワタシは最後まで動かし続けていた秒針の動きを静かに止めて、“坊ちゃま”と言うには余りにも“おじちゃま”になってしまった坊ちゃまの寝顔に最後の別れを告げて、永遠の時の世界へと旅立って行ったのです。

そして、偶然にも居間で働き続けていた同朋の彼女も、何が原因なのか判りませんが、その数日後に、ワタシよりも少し短い生涯を静かに居間の壁で終えてしまったのです…。

8月の終わりに、昭和46年に買った目覚まし時計が壊れて全く動かなくなった。電池切れかと思っただが、新品の電池に代えてもうんともすんとも動かないので、やはり時計の寿命が尽きたと考えていいだろう。真っ赤なプラスチックの外枠は、度重なる目覚ましスイッチの停止操作による衝撃により、割れてひびが入っては修理してを繰り返していたので、満身創痍状態であったが、それでもなおけなげに正確に時を刻み、朝になっては起床の時を知らせ続けていた。

しかし、さすがにここ数年間はベルの音も鳴ったり鳴らなったりで全く信用が置けなくなっていたので、4代目の目覚まし時計を脇に置いて(そう、常に2台の目覚まし時計を置いて備えていたが、サブの目覚まし時計は次々に壊れて、既に4代目となっていた…)古い目覚まし時計は、音を出すこともなく正確な時間だけを刻み続けていただけに、とうとうお迎えの時が来たのかと思うと感慨無量であった。高校生の時代から、私にとってはなくてはならない目覚まし時計であり、結婚後も、私たち家族の寝顔や寝起きの顔を見続けて、けたたましい目覚まし音とともに一日の始まりを告げるお勤めに励み続けた44年の生涯だった…。本当に長い間ご苦労であった。

そして偶然にも9月の初めに、自宅居間の壁掛け時計も動かなくなった。電池切れかと思って新品の電池に代えたが、やはりこの時計もうんともすんとも動かない。こちらは昭和59年に自宅を新築したときにお祝いにもらった壁掛け時計で、時間の修正もほとんどしたことがないくらいに正確に時を刻み続けてくれていた、大変優秀な時計であった。我が家の居間の壁から31年間、子供の成長や家族の生活を静かにものも言わずに見守り続けて、とうとうお迎えの時が来たようである。こちらの時計にも、本当にご苦労様でしたと言葉をかけてやった。

時計とは、不思議な生活用品である。目覚まし時計のように、けたたましく鳴り響くことにより、その人の一日の始まりをサポートする機能のものもあれば、居間の壁掛け時計のように、音も立てずに静かにひたすら正確な時を刻み続け、その家で生活する人々の行動の規範となっている存在もある。また、腕時計のように、その所有者の肌に四六時中張り付いて行動を共にして、その人以外は誰も知らないような人生の秘密をも共有するほどの、深い関係になる時計もある。そして、時計の寿命が尽きるまでその時計と付き合い合っただけで生活をしたあとには、ある種の爽やかな清々しさが残るものだと、今回しみじみと感じていた。もしも時計に“魂”というものが存在するのなら、是非ともその魂の声を聴いてみたいものだと思ってこの拙文を書いたものである。

この二つの時計のようと言う訳でもないのだが、私も寿命の続く限り精一杯生きて、爽やかな悔いのない清々しい人生の最期を迎えたいものだと思つた次第である。

おしまい
AKIRA MIURA
2014年11月